

令和4年度 新人現場研修報告

鹿田 創空・濱治 良彬・土井 敦史・森 将人

1. はじめに

当社は、陸水域から沿岸域、さらに深海域にまで至る広範な水圏環境を対象に調査・研究を行っている。今年創業50周年を迎えるが、当社がこれまで事業を継続してこれたのは、日々の各社員の努力によるものが大きく、それは入社した時から始まっている。当社では、入社後本社において約1ヶ月間の新人研修が行われ、研修期間の最後には現地調査の研修を行っている。現地研修では、海域等のフィールドにおいて安全に且つ確実な現地データの取得と試料採取を適切に行う最低限の技術を身に着けることを主な目的としている。また、各自研究テーマを設定し、計画・準備から調査の実施、分析および結果の解析まで一連の流れを体験することで、実際の業務におけるイメージを養うことも目的の一つとなっている。

現地研修の場所には、長年にわたり千葉県鴨川市小湊を利用してきた。小湊にはかつて東京水産大学の臨界実験所が所在し、当社創業時のメンバーにとって馴染み深い場所であったこともあり、研修場所として選定された。その後も継続したデータ収集の必要性もあって、平成6年からは毎年のように実施されてきた。これまでは本社主体で行われてきた現地研修であったが、今後は各支店持ち回りでの実施となり、今年度は中部支店主体で行うこととなった。それに伴い、現地研修場所を愛知県に移し、新たに地点を設定した。

愛知県知多郡南知多町師崎において、師崎漁業協同組合の協力を得て、講師4名、研修生4名で実施した。

2. 工程

2022年4月19日～22日の4日間で実施した。(表1)

表1 研修工程

年月日	研修内容
2022/4/19	<ul style="list-style-type: none"> ・現地調査準備 事前打合せ、安全会議、各種書類作成 調査内容の講習(資機材の取り扱い方法等) 調査資機材の準備および動作確認 ・車両移動
2022/4/20	<ul style="list-style-type: none"> ・海域乗船研修1 水質観測:多項目水質計、水質試料採取 底質観測:採泥、pH・ORP測定 生物試料採取:魚卵稚仔、マクロベントス ・河川調査講習 投網実習
2022/4/21	<ul style="list-style-type: none"> ・海域乗船研修2 気象観測:風向風速計 水質観測:多項目水質計、水質試料採取 生物試料採取:動植物プランクトン ・潮間帯調査 目視観察 ・採取試料の処理方法 水質試料濾過(サイズ分画クロロフィルα) ・ロープワーク実習
2022/4/22	<ul style="list-style-type: none"> ・車両移動 ・調査資機材の洗浄、片づけ ・多項目水質計のデータ整理 ・各種書類作成 ・反省会

3. 調査位置

研修場所は愛知県知多郡南知多町師崎地先の海域および南知多町豊浜の海岸(図1)で実施した。知多半島の先端に位置し、北～南東は三河湾、南は伊勢湾に接し、陸地から侵入できる磯は少ないが比較的広い磯が点在し、小規模ながら潮干狩り場も点在する。海域での乗船研修は5地点(St.1～St.5)、潮間帯の研修は南知多町豊浜のまるは食堂旅館前の海岸において実施した。

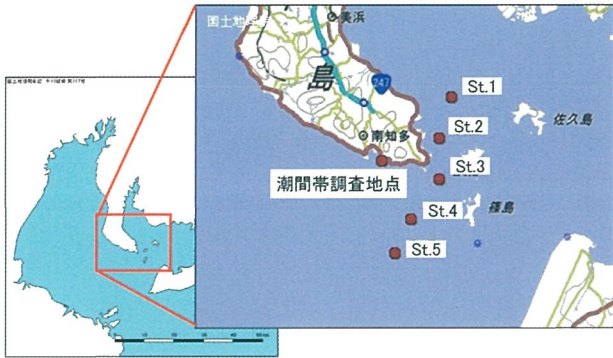


図1 調査海域



図2 乗船前のKY活動



図3 風向風速計による気象観測



図4 マルチネットによる魚卵稚仔魚採取



図5 スミス・マッキンタイヤー型採泥器による採泥



図6 投網練習



図7 海域乗船研修



図8 バンドン採水器による採水



図9 潮間帯研修

4. 研修生の感想

・廣田 佑介

今回の研修では、愛知県の師崎にて二日間海域の調査を実施しました。学生の頃は、船を使用しての調査に参加したことが無かったため船上での作業には不安がありましたが、海況が穏やかであったので比較的揺れは少なく問題なく作業に集中する事ができました。

研修では、機器材の準備から片付けまでの間で多くの事を学びました。二日目の天気が悪くなる予報であった為予定を変更し、一日目に各地点の水質測定、マルチネットによる卵稚仔の採集、スミス・マッキンタイヤー採泥器による採泥とメイオ、マクロベントスの採集を行いました。午後からは投網の練習を行いました。練習は陸上で行いましたが、実際は川の中で、狙った場所に投げなければならない、網の大きさを均等にしなければいけないなど多くの要因を考慮しなければならず、難しいと感じました。

二日目は午後から天気が悪くなる予報であった為予定を早めて調査を行いました。今回の研修もそうでしたが、実際の調査でも期間中の気象状況や海況に応じて臨機応変に対応する必要があり、それを実際に体感する事ができました。午後からは潮間帯の生物観察を行いました。潮間帯では多くの生物が生息しており、潮間帯の帯状分布を確認する事ができました。

この研修では、調査機器材の使用方法や調査の一連の流れなどを学べる良い機会でした。また、今後の課題や問題などを発見することもできました。今回学んだことを活かせるように日々努力していきたいです。

・水野 佳季

学生時代は、山林でのニホンリスの研究や河川での生物調査を行ってきた。そのため、船に乗る機会は皆無であった。船上での作業は今回の研修が初めてのため不安材料が多く、特に不安だったのは船酔いであった。幼少期から乗り物酔いが多く、研修中に船酔いすることも予想できた。そこで、事前に先輩方から酔い止め薬の情報を集め、対策をした。しかし、内湾での研修であり予想よりも揺れが小さかったため、船酔いをする事はなかった。

船酔いはしなかったが、不安定な船上での作業はすべてが初めての経験だったので、苦勞することが多かった。特に、採泥器の引き上げが想像以上に重く、自分の体力のなさを痛感した。しかし、講師の方々から作業の手順や機器材の扱いを丁寧に教えていただき、無事に作業を終えることができた。

宿に戻ってから教えていただいたロープワークも初めての経験であった。基本的なものを教えていただき、その場ではうまくできたがすぐに忘れてしまいそうなので、これからも自主的に練習していきたい。

今後は、現場作業だけでなく検鏡や同定などを経験することになる。研修以上に初めての経験が多いので積極的に学び、反復して練習したい。また、現場作業に備えて体力の向上にも努めたい。

・安武 由矢

社会人となって初めての海域での調査となった現地研修だが、これまでフィールドとしてきた九州北部に位置する玄界灘とは全く異なる太平洋側の師崎沖での研修は楽しみであった。大学での研究では、漁船に乗りマルチネットの曳網や水質計を用いた水質観測は行ってきたが、採水器や採泥器を用いた作業は経験がなかった。また、漁船といえども地域も違えば文化も違うということでこれまでの経験がどこまで通用するかの不安も多々あった。

まず、第一の関門は船酔いである。学生時代、幾度となく悩まされた強敵で、相棒である酔い止めを片手に抵抗してきた。今回は湾であったためか、酔い止めの力か、船酔いはなかった。第二の関門であるマルチネットの曳網はクラゲが入ったり、ボンデンがネット内に入ったりといろいろありながらも採集は成功した。ここまでは経験もあったので作業中に予測しながら動くことはできた。しかし、鬼門は第三の関門の採泥器の引き上げである。見たことはあるが触ったことはない器材で、きちんと泥を回収できるか半信半疑ながら引き上げた。そして案の定何回も失敗した。同地点で何度も採泥器を引き上げ、引き上げる手もおぼつかない。見かねた先輩が採泥すると一発で成功した。自分のふがいなさを感じつつ、採水に移る。採水器も蓋が閉まらないのではと思いつつ作業をしたがこちらは成功した。そして、船上での作業

を終え作業終了となり、わたしの自主研究のサンプルである魚卵がうれしいことに大量に採集できた。宿でソーティングし終わらなかった分は配属先へ送り作業をすることになり、時間の見積もりが甘かったと反省している。

現地研修ではこれまで経験したことが通用する部分と通用しない部分を明確にでき、改めてこれからしっかり学んでいきたいと思った。また、肉体的に船上で作業するにはまだまだであると痛感し、事故防止のためにも体も鍛えなおす必要があると感じた。

最後になったが、現場の間のお忙しい時間に現地研修の準備、指導をしてくださった講師の方々、研修中にご指導賜った先輩方にお礼申し上げる。この研修期間を通じて学んだことを生かし頑張りますので、これからもご指導頂きたい。

・講師 4人を代表して 中部支店 鹿田 創空

例年、千葉県の小湊で実施してきた新人現地研修を、今年度は中部支店で実施することになり、現地研修場所・海域の選定や実施内容、資材および人員の調整等を短期間で行って、現地研修の実施に漕ぎつけた。通常の業務とは異なるため、慣れない部分で苦勞もあったが、無事遂行出来たと安堵しているところである。

研修生は今後、業務として様々な環境での調査に参加していくことになるが、いかに安全に調査を実施するかは勿論のこと、その調査は何のために行っているのか、どのような結果が求められているのか等の情報を先輩社員と共有した上で臨むよう、高い意識で取り組んでいくことを望みたい。

最後に、本研修実施にあたり助言して下さった方々に感謝申し上げます。

